



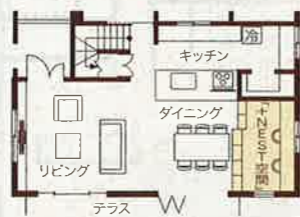
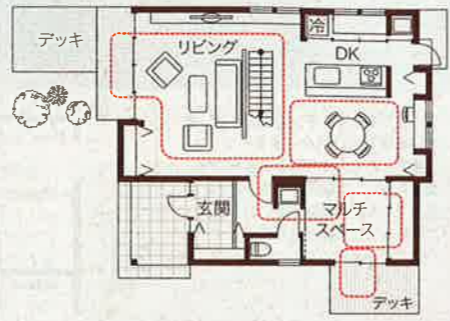
元気に走り回れる 回遊型LDK

idea
2

リビング・ダイニングは、家族や来客とのコミュニケーションの中心となる大切な空間。「子どもにとっても、遊んだり、勉強したり、友達を連れてきたりする場所。のびのび動き回れるスペースを確保しましょう」と藤田さん。

近年は住宅性能の進化により、間仕切りのないオープンな空間を確保しやすくなっているが、「隣接する和室の建具を開放し、リビングの延長として使えるようにするなど、開閉できる工夫があれば、広い空間をより有効に使えます」

間仕切りを設けずオープンにつながるLDKなど、行き止まりのない「サーキュレーションプラン」ののびのび動けるプランが子どもの感性を豊かに。/ミサワホーム「GENIUS Link-Age (ジニアスリンケージ) with Kids」



小学生の多くがLDで勉強するとのデータをもとに生まれた「+NEST空間」。LDKの一角に子ども用学習スペースを設けることで、子どもは家族の気配を感じ、親は子どもを見守りつつ安心して過ごせる。/旭化成ホームズ「+NEST (プラスネスト)」

idea
3

家族とのつながりを 楽しめる子が育つ

リビング& ダイニング階段

多くの住宅メーカーが提案するリビング階段。子どもが成長し、知らないうちに外出していたり、帰ってきて自室にこもったりという状況を防ぐため、「玄関から2階の自室へ行くときに家族がいるリビングを通らないといけないような位置に階段を設ける」という提案。小さいころから日常的に家族とコミュニケーションをとる習慣が身につきます」と藤田さん。最近では、食事をする場所をコミュニケーションの中心と考え、ダイニングに階段を設けるプランもある。



家族が食事をともにし、コミュニケーションが生まれやすい「ダイニング」を生活動線の中心に、という発想から「ダイニング直結階段」を提案。朝出るときも、帰宅するときも、ダイニングを通る子どもを自然と見守れる設計。/住友林業「mamato (ママト)」

自主性を育む 自分の居場所があるリビング

idea
4

子どもは起伏に富んだ凹凸のある空間が大好き。例えばリビングより一段高い畳コーナー、一段低いリビングなどは「高さ方向の視界が変わることで、空間の感じ方が変わり、他とは違う特別な世界だと感じ、想像力や創造力のスイッチが入ります」と中村さん。「ほかより高い空間は気持ちワクワクして前向きになる効果があり、創作する空間にぴったり。低い空間は囲われ感がありリラックスできるため、自然に家族が集まり、くつろぐ空間となるでしょう」



リビングの床の高さを変えることで子どもの「イドコロ」を明確に。上：床を低くすることで心理的な落ち着きが得られる「ビットリビング」、左：高くすることで適度な距離感が生まれる「ステージリビング」。/積水ハウス「キッズでざいん コドモイドコロ」

専門家に学ぶ 子育て家族のすこやか間取り

子育て家族にとって理想の住まいとは？ 注意すべきポイントは？ 専門家の考え方を解説するとともに、住宅メーカーの提案も紹介

遊び、学び、お手伝いなど 人とかかわり合いながら 豊かな体験ができる環境を

〈お話をうかがった方〉

●積水ハウス 総合住宅研究所 / 中村孝之さん
1980年より商品開発、2003年より日本のこれからの暮らしを研究。「子どもの生きる力を育む家」(住まいの図書館出版局)などを著述

●ミキハウス子育て総研 / 藤田 洋さん
2006年「子育てにやさしい住まいと環境」認定事業開始。著書に「元気な子どもが育つ家」(週刊住宅新聞社)など

上手に子育てしたいと気負うあまり、その方法に悩んだり、ストレスに感じたりする親が増えていくという。ところが、「親が思う以上に、子どもは生きる力を自らもって生まれてきています。その力を育むために、住まいにはできることがたくさんあります」と積水ハウスの中村孝之さん。

「例えば、自然と触れ合える空間は『感性』を育み、走ったり転がったりと全身を使って遊べる空間が『身体』の発達を促し、知りたがりやという好奇心が『知性』の芽を伸ばし、人と一緒に何かをする空間が『社会性』を伸ばしていく……こうした仕掛け

を住まいの中につくることにより、子どもは自分で自分のもつ能力をどんどん引き出していきます」

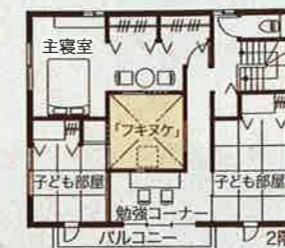
特に「親と子どもが直接住まいの中で向き合う時間が最も長い乳幼児期こそ、住まいの工夫が大事」とミキハウス子育て総研の藤田さん。「子どもの発達上きわめて大切な時期に、どんな家に住むかがポイント。間取りや設備に工夫することが、その後の子どもの自立に大きく影響します」

遊んだり、お手伝いしたり……。子どもが生きていくうえで必要なたくさんのことを体験する住まい。そこには具体的にどんな工夫があればいいのか、考えていこう。

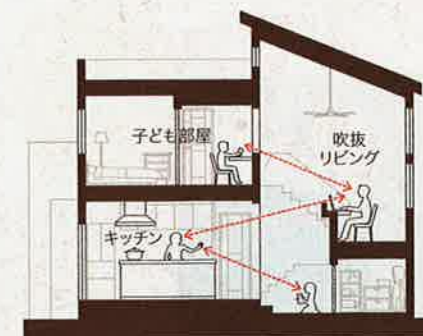
idea
1

どこにいても 家族を感じて遊べる 吹抜けリビング

1階にリビング、2階に子ども部屋のある家が多いなか、子どもが親のいる1階から離れないことも。そこで多くの住宅メーカーが提案するのが、リビングを吹抜けにし、2階とつながるアイデア。「家族の気配が家中に伝わり、子どもは安心して居場所を広げることができます」と中村さん。「つながりをいつも感じられる空間は、家族の絆を深め、子どもの自立も促します」。床の高さを半階ずつずらしたスキップフロアも、空間をゆるやかにつなぐ効果がある。



家族が自然と集まってコミュニケーションを図る「ヒロマ&フキヌケ」。1階中央「ヒロマ」の建具を開放すると1階全体が見渡せ、「フキヌケ」を通じて2階にいる家族の気配も感じられる。/ダイワハウス「HAPPY HUG (ハッピーハグ) II」



ゆるやかにつながるスキップフロアと吹抜けにより、住まい全体がひとつになるプラン。家族がお互いの存在をいつも近く感じながら、それぞれに安心して過ごせる、開放的な住まいに。/三井ホーム「tokotoko (トコトコ)」

その時々家族に合わせて住まいを変化させる「先読み設計」を提案。例えば共用の子ども部屋から、「可動間仕切り」で個室へ変化させるなど、柔軟な部屋づくりが可能。/ミサワホーム「EL・SOLANA (エルソラーナ)」



子どもの知性・感性を育む 自分だけの子ども部屋



「子どもには家族や友達と集える場所が必要ですが、成長したらひとりになれる場所も必要」と中村さん。大きな空間をリフォームで分割する方法もあるが、「最近では上下左右にしっかり固定させて間仕切りできる家具もあります」子ども部屋の内装を子どもに選ばせるのも一案。「床や壁などの仕様を自分で選ぶことで、自分にとって大切な空間となり、愛着をもって掃除や片づけをするようになります。仕様選びを通じて親子で話し合うこともいい体験です」

お気に入りのインテリアに囲まれた自分の部屋をもたせ、子どもの感性や知性、社会性を育む。自分で仕様を選び、コーディネートすることで、部屋への愛着が生まれる。/積水ハウス「キッズでざいん コドモイドコロ」



好奇心を育てる 外の自然と 触れ合う暮らし



最近ではエコロジーや食育などの観点から、家庭菜園をもつ家も増えてきている。ところが、「畑のように本格的なものより、ボックス型のプランターにすると扱いやすく、使う機会が増えるかもしれません」と中村さん。

例えば室内と菜園ボックスの間がウッドデッキでつながった間取りなら、「室内からスリッパをはいたままで外に出られたり、『ちょっとピーマンとってきて』などと子どもに頼めたりして、日常の中に取り入れやすくなります」



緑を育てることと、食生活を結びつけた屋外空間「菜園ガーデン」。独自のシステムガーデンファニチャーと植栽ノウハウを組み合わせて、ハーブや葉もの野菜、深い鉢には大根なども栽培できる。/積水ハウス「菜園ガーデン」



大きな事故につながりやすい階段は、勾配を緩やかにし、踏み板に溝を入れて滑りにくい仕様。さらに手すりもしっかり握れる「階段連続手すり」を採用し、より安全に。/ミサワホーム「GENIUS Link-Age with Kids」

子どもが元気に 遊べるための 危険を防ぐ工夫



子どもをのびのびと遊ばせるために欠かせないのが、家の中の危険を防ぐ工夫。例えば階段からの落下を防ぐ手すりや素材、道路への飛び出しを防ぐ間取りなど「あらかじめ間取りや設備に工夫しておくことにより、重大な事故に至らずにすむことも多いでしょう」と藤田さん。「特にハイハイやヨチヨチ歩き、いたずら盛りの2〜3歳くらいまでの時期は十分な配慮をしたいものです。住宅メーカー各社でもさまざまな提案をしているので参考にしよう」



家の中はもちろん、危険の多い「外」とつながる玄関の設計も、安全性に配慮。例えば玄関ドアと道路の間に塀を設けるなど、子どもが玄関から道路へと飛び出すのを防げるような設計に。/ダイワハウス「HAPPY HUG II」

間取りや設備に工夫して 子育てを楽しめる住まいをつくらう

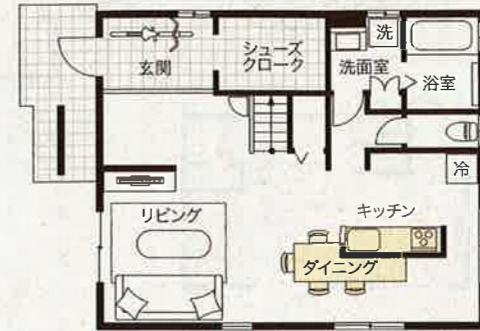
子どもが元気に遊んだり、何かを真剣に学んだり、きょうだいや友達と仲良く遊んだり……そんなシーンがいつかの暮らしをつくるには、ちょっとした間取りや設備の工夫があればいい。住宅メーカーには、ここで紹介したほかにもさまざまなアイデアが用意されている。プロの知恵を上手に活かして、子育てを楽しめる住まいをつくらう。



子どもたちが大人を見て 家事に参加しやすい家に 対面式キッチン& ダイニング

お片づけや掃除、お手伝いのできる子どもに育ってほしい。そのためにはまず、親の行動が見える状態をつくるのが大切だ。「例えばゴミ箱。母親が分別しやすいキッチンの奥ではなく、あえてダイニングの一角などに置いておくのも一案。子どもたちも分別しやすくなるでしょう」と中村さん。「オープンなLDKはコミュニケーションがとりやすいうえ、親が家事をする姿が自然と子どもの目に入り、家族みんなが家事に参加しやすくなります」

ダイニングをキッチンと融合させ、家族の絆を育む「スマートダイネット」を提案。みんなで料理と食事を同時に楽しんだり、お絵描きする子どもと会話したりなど、時間の使い方やコミュニケーションの幅が広がる。/ダイワハウス「xevo Li (ジーヴォリアン)」



玄関とLDの間に「家族ロッカー」を設置。ランドセルや衣類など、自分のものは自分で片づける習慣をつけ、子どもの自主性を育む。また、親と一緒に身支度することでコミュニケーションも。/旭化成ホームズ「+NEST」



帰ったら手洗い・ うがいの習慣が身につく 玄関近くの 洗面台



手洗い・うがい、着替えなど「自分の身の回りのことが自分でできるかどうかは、集団生活になじめるかどうかにも大きくかかわってきます」と藤田さん。そのためには「生活習慣が身につくやすい“動線”の工夫が大切です」例えば帰宅後にすぐ手が洗えるよう、玄関近くに洗面台を設けるなど、行動パターンに合った動線に工夫したいもの。「自立した子どもは集団生活にもしっかりついていけることができ、自分に自信がもて、友達も増えていきます」

片づけられる子になる 子ども用収納



子どもの自立を促すために、もうひとつ大切なのが「自分のモノを自分で片づけられるようになるということ。決まった収納場所に戻す習慣が早く身につくよう、子どもが自分で戻しやすい工夫をあげましょう」と藤田さん。

例えば外で使うモノはまとめて玄関近くに収納スペースをつくるのも効果的。「使うときに出しやすい動線に加え、子どもにとって出し入れしやすい高さも大切。部屋が散らかりにくくなり、外出時の忘れ物の防止策にもなります」



外から帰ったらすぐに手洗い・うがい・トイレができるよう、玄関近くに手洗いカウンターとトイレを設けた「ただいま動線」。自分でできることが子どもの自立心を育む。/ミサワホーム「GENIUS Link-Age with Kids」